黄なり、土中より堀出す、又山田郡畑村より東へ三十餘町山中にあり、色白し、赤白黑の斑文あり、

〔兼葭堂雜錄三〕今世火燧の木の面に、本家明珍と記せることは、一說に、享保九年辰三月廿一日、大坂堀江橘通二丁目金屋喜兵衞借屋妙智といへる老尼の宅より火出て、大火に及しより、妙智の火は能出るといへる譬よりして、文字を書更、明珍とせしよし言傳ふれども、是は正しく無稽の者の妄說にして、左にはあらず、明珍は鍛冶職の名字なり、〇略中按ずるに、明珍は冑の鉢の鍛冶職なり、後世火燧をも錬て販しより其名殘れり、尤餘の鍛冶に勝れて、明珍の火燧は錬よきを以て、世に名高かりし故、終に火燧の銘とはなれるなり、然るに後世其火燧と共に火口をも商ひて、是にも明珍の名を袋に玄るせしより、今は火口の製法家の名と心得し人も有て、其濫觴を知人少し、

〔浪花雜誌〕街迺噂三〕鶴人、なるほどさやう〳〵モシ其火口箱も御覽じやし、江戸より四角でムリヤ正、そして鎌もちいさく、石も鼠色でムリヤス、万松なるほど大同小異でありやすねい、然し江戸でも近頃は此鼠色の石が、流行いたしやすよ、文政の中頃迄專ありやした、眞白な火打石よりは、此方が火が出るといふことでムリヤス、鶴人なるほどさうかも知やせん、火口も大坂では旅火口でムリヤス、江戸のやうな麻殼や、もろこし殼は用ひやせん、千長、へ、引それでは鎌も微さくて間に合ヤス、どふりで火口箱も小ぶりでムリヤス、

〔見た京物語〕乞食集りて、摺火打にてたばこのむ、呵る體なし、

〔守貞漫稿後集四雜器〕燧囊

燧鐵、京坂ニテハヒウチガヲ、江戸ニテハヒウチガマト云、上州□□吉井氏ノ製ヲ良トス、

火口ホクチト訓ズ、蒲穗ヲ以テ製之、黑赤二種アリ、三都トモ燧囊ニハ用之、京坂日用ニモ用之、江戸常ニハ火口木ト云、草幹ヲ燒キ炭トシテ用之、故ニ蒲製ヲ特ニ熊野火口ト云、日用ニモ稀ニ用